

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

オバマ演説が私達に突き付けるもの

What Obama's Hiroshima Speech Posed to Us

(English version of this essay is available at IBM)

石積 勝 (M. Ishizumi)

5月27日オバマ大統領は広島を訪問しスピーチを行った。このスピーチについては様々な評価があるが、わたしは、なかなか格調の高いスピーチであったという感想を持った。官僚の作文を読んでいるわけではないことははっきりと伝わってきた。スピーチを生中継していた米国 CNN のコメンテーターは「哲学的な」とさえいつていたが、私もそう感じた。ただ大きな限界も露呈している。最後まで情緒的なスピーチで終始しているのである。それこそ歴史的なスピーチ一歩手前で足踏みしているのである。このことの原因を少し考えよう。

私が格調高いと感じ、CNN のコメンテーターが哲学的とさえ言う部分は、以下の様なフレーズである。

- 「原子の分裂につながる科学の革命は、道徳的な革命も求めている。」(The scientific revolution that led to the splitting of an atom requires a moral revolution as well.)
- 「われわれは戦争そのものについての考えを改めなければならない。・・・破壊する能力によってではなく、築くものによってわれわれの国家を定義するために。」(We must change our mindset about war itself ...to define our nations not by our capacity to destroy but by what we build.)
- 「すべての人のかけがえのない価値、すべての人の命が貴重であるという主張、われわれは人類というひとつの家族の仲間であるという根源的で必要な考え。われわれはこれら全てを伝えなければならない。」(The irreducible worth of every person, the insistence that every life is precious, the radical and necessary notion that we are part of a single human family: that is the story that we all must tell.)

- 「普通の人々はこれを理解すると私は思う。彼らは、戦争はこりごりだと考えている。」(Ordinary people understand this. I think. They do not want more war.)
- 「広島と長崎は核戦争の夜明けとしてではなく、道徳的な目覚めの始まりとして知られるだろう。」(Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.) ——日本語訳は『東京新聞』版——

しかし最後のフレーズにある「道徳的な目覚め」からすでに71年がたったが「道徳的な革命」はいまだに起こっていない。普通の人々は根源的な考え方や国家の行動原理の変化を求めているかもしれないが、実際のところ「国家の定義」・「行動様式」は全く変わっていない。こうした現実を私たちはよく知っているから、オバマのスピーチに「理想と現実との乖離」を感じるのである。CNN のコメンテーターのもう一人は、哲学的というよりは「宗教的」であるとさえ言っていたが、現実的な実行力が問われる政治指導者としてはかなり危ういスピーチであったということである。評論家としてのスピーチと紙一重のところだったのである。

スピーチ原稿に何回も自分で手を入れたらしいオバマはその最中、高揚していたと想像できる。その時、心のどこかで「米国建国の父たち——フェデラリストたち」や、リンカーン、マルチン・ルーサー・キング等の哲学的政治指導者のことが頭に浮かんだかもしれない。確かに広島スピーチのトーンはそれに通じるものがあるのだが、残念ながらやはり羊頭狗肉の感じが残る。なぜか？

上記の正真正銘の哲学的政治指導者たちは、それぞれに彼らの歴史的演説や文書(例えば "Federalist Papers")を内容的に支える「新しい政治理論」を背負っているのだが、オバマには、あるいはオバマが代表するアメリカ、もっといえばわれわれが身を置くこの現代社会には、その「新しい政治理論」が、いまだに準備されていないからである。スピーチがやはり「願望」に終わっているゆえんである。「道徳革命」や「国家の再定義」、特に「国家と暴力の関係」、「社会統治と暴力装置の関係」の再定義、それを支える政治理論、あるいは「社会科学グランドセオリー」なしには、やはり、もっぱら道徳に訴える「願望」としての情緒的なスピーチにならざるを得ないのである。

それにしても彼が自覚していたかどうかは別にして、オバマはじつは極めて大きな、そして待ったなしの問題提起をしていることは事実である。彼は現在の(ということは西洋近代の)政治理論、社会理論の克服を広島で訴えたのである。最大最強の暴力装置を保持する米国の現実政治のリーダー、即ち西洋近代社会の成立と運営のトップランナーであり続けた米国のリーダーが、自らを支え続けてきた社会理論の基本

の基本、即ち政治=国家=権力=物理的強制力・暴力(M・ウエーバー) >という定式の克服、あるいは否定を、提起しているのである。

オバマのスピーチは確かに情緒的、直感的、格好つけではあるが、しかし、その問題提起は人類史における壮大なブレークスルー、社会科学認識枠組み、社会科学グランドセオリーのパラダイムシフトを真摯に希求したのもであったのである。ここから先は知識人といわれる者たちの洞察力と理論構築力こそが真正面から問われることになる。

「私が生きているうちに、この目標(核兵器なき世界)は達成できないかもしれないが、たゆまぬ努力が大参事の可能性を小さくする。」(We may not realize this goal in my lifetime, but persistent effort can roll back the possibility of catastrophe.) などという、オバマのユルイ(緩い)発言を簡単にスルーしている場合ではないのである。私たちはオバマの広島スピーチのその先を、今すぐに切り拓かなければならないのだろう。「暴力の連鎖」の世界の現実は、それを私たちに突き付けている。

(所員/いしづみ・まさる)

「身近な名所」

大田 博樹

注意深く探してみると、意外と近くに名所があることに驚かされる。湘南ひらつかキャンパスから車で40分ほど、電車だと小田急線の栢山駅から徒歩15分ほどの小田原市郊外に、二宮金次郎の生家がある。二宮金次郎といえば、薪を背負って勉強した少年として有名であり、勤勉さの象徴として全国各地の小学校に銅像が設置されている。もともとは裕福な家庭に生まれ育った金次郎だが、付近を流れる酒匂川の度重なる氾濫の影響で田畑が荒廃し、心労により父母が死去したことで若くして苦労したという。しかし、その後「小を積んで大となす」という信念のもと家を再興し、「報徳」と呼ばれる仕法を実践することで、小田原藩老中服部家の財政再建をはじめ、各地で復興事業や飢饉対策などで成果をあげ社会に

貢献した。

その金次郎は、数多くの名言を残している。たとえば、「道徳を忘れた経済は、罪悪である。経済を忘れた道徳は、寝言である」や「木の根を忘れては、枝葉は育たない」などは、現在の企業の社会貢献活動に通じるものがある。また、「湯を押し与えれば、やがて我が身にもどってくる」や「人の真心は草木にもわかるものだ」などは日常生活においても考えられる言葉ではないだろうか。二宮金次郎の銅像は、勤勉さの重要性だけでなく、現代社会に通じる様々な教訓を伝えている。

新年度が始まる頃、ニュースで「座っている金次郎の銅像」があると聞いた。なんでも歩きながら本を読む姿の真似をして、歩きスマホをする小・中学

生が増えると困るという指摘があったのだそうだ。金次郎像は、もともと歩きながら勉強することを推奨するために設置されている訳ではない。薪を背負い歩きながら本を読む姿という表面的なものではなく、若い頃より苦勞をし、経世済民のため奔走した金次郎が本当に伝えたかった「本質」に気がつく必

要があるのではないだろうか。生家を訪れることで、物事の本質を知る大切さを考えさせられる。注意深く探してみると、意外と近くに名所があるものだ。

(所員／おおた・ひろき)

参考：報徳博物館 HP <http://www.hotoku.or.jp/>

2016 年度における国際経営研究所の活動について〔続報〕



客員研究員(50音順)

<新規>

小森谷浩志(経営学部非常勤講師/(株)ENSOU 代表取締役)

土屋 翔

平田 沙織(経営学部非常勤講師)

<更新>

大山 俊介(2012～国際経営研究所客員研究員)

小渕 昌夫((株)エイピーベッカー代表取締役)

田中 美和(経営学部非常勤講師)

畑中 邦道(2012～国際経営研究所客員研究員)

出版活動(国際経営フォーラム)

『国際経営フォーラム』NO.27の特集テーマは「リスク・挑戦」です。国際分野でも経済分野でもますます高まるリスク。企業も人々も様々なリスクにどう対応し挑戦するか、をテーマとしました。

公開講演会(2016年度第1回目)

日 時 2016年6月10日(金) 11:00-12:30

場 所 神奈川大学湘南ひらつかキャンパス 1-249

テーマ 企業のグローバリゼーション化におけるリスクと挑戦

第1回公開講演会を開催しました

研究所主催の公開講演会が6月10日に開催されました。今回は岡本ゼミ出身の工学卒業生であるお二人が講師として講演され、今年度のテーマである「リスクと挑戦」をキーワードにグローバル企業ならではの側面から、また人事面から、現在の企業の在り方、今後のビジョンなど語っていただきました。工学卒業生とのことで学生も身近に感じながら、企業で活躍する厳しさ、心構えを真剣に聴講していました。

テーマ:

企業のグローバリゼーション化におけるリスクと挑戦

講演者

HOYA株式会社 ビジョンケア部門

日本営業部 大阪第三販売課

マネジャー 吉田 寛 氏

株式会社日立国際電気

人事総務本部 人材戦略部 採用・教育グループ

部長代理 末岡 麻希 氏



今年度の研究所常任委員業務

2名の常任委員(新任はゴシック)が交代しました。

所長 行川一郎(再任)〈地域連携事業担当〉

常任委員(4名)

高城 玲 〈講演会担当〉

山崎友彰 〈ホームページ担当〉

石濱慎司 〈国経研だより担当〉

大田博樹 〈国際経営フォーラム担当〉

研究活動(共同研究プロジェクト:新規/申請順)

- 組織行動の基礎研究
ー経営学、社会学および歴史学からの比較研究ー
代表者: 照屋行雄
- 『大学ガバナンスと国際化の研究』
ー大学マネジメント国際比較からの考察ー
代表者: 石積 勝

Die Freude am Lernen 学ぶ楽しさ

大槻 茂久

私は2013年より経営学部の非常勤講師として健康科学や競技スポーツ、ゼミを担当し、課外活動では女子サッカー部の監督しております。またプライベートでは、留学先で知り合ったドイツ人の妻と8年前に結婚し、3歳と4歳の愛娘の父親として毎日異文化に触れながら楽しく生活を送っています。この度は大先輩のI先生の依頼を受けて初めて研究余滴の原稿を書かせて頂くことになりました。これはサッカーというまさしく「キラーパス」です。テーマは自由ということでしたので、今回は「学ぶ楽しさ」について、妻と討論しながら...

「キックオフ」

「学ぶこと」って結構大変だよな? 「学ぶこと」は楽しいこと?

妻と私は、学ぶと言うとまず学校のことが頭に浮かんで、小学校に入学して大学を卒業して就職するまでのことを考えました。しかし、現代の国際社会(国連等)では、学校だけではなく生涯を通して学び続けることが大切であるとされています。そうすると、生涯を通して学び続ける人生は大変、楽しみがない? 「学ぶこと」と「楽しむこと」は対照的? という様なことになるのでしょうか。

「学ぶこと」は学校から始まるのではなく、母親のお腹の中からすでに始まっていることをほとんどの人が忘れていないのでしょうか。本来、「学ぶこと」は外から与えられるものではなく人間の心、ハートから自然と湧き出るものではないのでしょうか。

小さな子どもを観察すると、ひとつのことに熱中し、知的好奇心が強いことが分かります。小さな子どもは、朝から晩まで「これはなあに? なんで? どうして?」などと興味があること、知りたいことを大人に質問します。状況に応じてママやパパ、保育園の先生など、相手を選んで質問をします。そして、興味があり成し遂げたいことがあれば、高いモチベーションと集中力で何度も繰り返し成功するまでチャレンジすることを楽しんでいるように思います。

誰もが一度は見たことがあると思います。まだ歩くことが出来ない赤ちゃんが一生懸命歩こうとする姿を。彼女は何度転んでも決して諦めません。彼女の目の前には目標があり、その目標を達成するまでやめることはありません。そして歩けるまで何度もトライします。それが彼女の自然な行動です。

ひとは大きくなって何が変わってしまったのでしょうか。本来ひとの心にある学びたいモチベーションや好奇心はだんだんと低下しているのではないのでしょうか。ひとは成長するにしたがって「学ぶこと」を、情熱(楽しみ)から義務へと移り変えて行くのではないか。子どもは、家庭や学校で大人から、人生の成功のために強制的に学ぶことを習慣化されているように思います。両親、先生は、こどもが成功するために、何をすることが大切かを決めてそれをさせているのでしょうか。しかし、それは一方で、こどもたちが、自分で学び、自分で決断、自分で責任を持つという機会を奪うことになっているのでは。私も大学に入る時、年齢的にはほとんど大人であるにも関わらず、精神的にはまだまだ子どものままであったような気がします。

現在の大学生のなかにはさらに未熟で、先生から何を学ぶべきか、何が自分にとって大切か、どんな目標がよいかを教えてもらうことを待っているように見えます。その一方で、課外活動を通して自分で目標を設定し主体的に行動が出来るようになった学生、精神的に自立していく学生をみることも出来ました。教員は、学生と共に知識を学び、ディスカッションし、人生の経験を話すことが出来ます。しかし、何をしたいか、どんな人になりたいのか、そして夢や個人の目標を決めることは出来ません。それは学生自身が考えて行動することです。私はこんなアドバイスがしたい。「小さな子どもに戻ってみるのはどうだろうか?」好奇心旺盛になって興味があることを発見し、知りたいことをどんどん探求し、恥ずかしがらずにどんどんチャレンジしてみよう! これが学びの楽しさではないか。

スポーツは、目標を設定して内なるモチベーションでその目標達成を学ぶ良い手段だと思います。サッカーというスポーツでは、状況が刻々と変化する中で、的確な判断をしてプレーすることがとても重要です。指導者は、自分で考えてプレーする楽しさを感じさせることが大切だと思います。

「アディショナルタイム」

妻との試合(討論)を通して、仕事や子育ても義務ではなく楽しむことが大事だと改めて感じました。

最後に、良き同僚の先生や学生達、そして良き妻と子供達に感謝と愛を込めて!

(非常勤講師/おおつき・しげひさ)



編集後記

第50号をお届けします。今回は、前学長の石積先生、新任の大田先生、女子サッカー部監督の大槻先生に原稿を依頼しました。日々の中でちょっとしたことに「気づく」ことは大切ですね。ありがとうございました。(I)